『社会科学ジャーナル』29(3)〔1991〕pp.81-100
The Journal of Social Science 29(3)〔1991〕 ISSN 0454-2134

オレスティーズ・A・ブロンソンの社会批判と学者批判：

——1840年代初期を中心に——

立川　明

I

南北戦争はアメリカの大学史においても画期とされている。この時を境として，小規模な宗派的カレジ中心から，州立大学やコーネル大学，エリオット下のハーヴァードの代表する新大規模大学の時代へ向かうというのである。(1) この時代区分は，しかし，具体的に史実を分析すると，修正の必要も見えてくる。地域によるズレもあろう。また，この区分が前提とする歴史の因果関係が，修正を迫られる場合もあろう。大学変革の，以前のとは異なった萌芽を見い出すかも知れないのである。

アメリカ大学史における1840年代と南北戦争期との関係は，こうした一例である。筆者は，科学の新傾向の台頭という観点から，この時代の特別な意義について嘗て何度か論じた。例えば，合衆国連邦議会による1846年のスミソニアン協会の設立の際には，伝来の教育・啓蒙組織の推進派と，実験科学の専門家とが，主導権争いを演じた。結果的には後者が勝利し，スミソニアン協会はプリンストン大学(College of New Jersey)の物理学者ジョセフ・ヘンリーを所長として，第一線の科学研究の推進機関として出発した。(2) こうした勝利には背景がある。1843年発足の地質・博物学者の団体は，早くも1848年には，科学の全部門を包摂するアメリカ科学振興協会AAASへと飛躍発展した。当時は科学者の全国レヴェルでの組織化の時代だったのである。(3) 当然にも，カレジでの科学者の影響力も増大した。(4) ハーヴァードとイエイルは，1840年代後半，共に企業家からの寄付

を仰いで，科学校を開設した。ダートマスやブラウン等も科学履修のコースの設立を開始した。こうした大学の科学者は，企業家からの寄付を自分達本位の目的に充当すべく，てぐすねひいて待っていたのである。[5]

1840年代は，コモン・スクールの飛躍の時代でもある。ホレース・マンやヘンリ・バーナードがニュー・イングランド諸州の初代の教育長としてその発展の基礎を作った。こうした地域では，1850年までには学齢人口の半数以上が何らかの形で就学し，コモン・スクールは公衆の一大関心事となった。[6] その裏面として，この時期には既存のカレジの公的性格は薄れ，その相対的地位が低下した。マサチューセッツやコネチカットでは，州は嘗てのように援助の手を差し延べなくなった。主要なカレジは1860年代，70年代私学化するが，この変化は1840年代の実態の追認とも言える。更に，1843年，ニュー・イングランド初のカトリック高等教育機関，ホリー・クロス・カレジが開学し，約２世紀にわたるプロテスタント・カレジの独占に終止符を打った。1840年代を通して，同地域でのカトリック信者数は，独自のカレジを要する勢力にまで伸長したのである。[7]

カレジ在学生数は，1840年代には合衆国全体で約九千と，白人同年齢層の１パーセントに留まった。[8] しかし，この時代のカレジは，一方では科学教育・研究を中心に新時代への適応を図りつつ，他方，変化する社会からの期待を失い，大きな変容を体験した。嘗ては公認されていた，その州民一般への役割は失われ，もはや公の財政的支持を得られなくなった。一体，カレジの問題点は当時の観察者の目にはどのように写ったのか。特に，当時の社会変動との関係に於いて，カレジの学生はいかに変容し，また，させられたのか。以下では，19世紀合衆国の希有な思想家オレスティーズ・Ａ・ブロンソン（1803-1876）の社会批判を1840年代前半の著作を中心に取り上げ，そこでの論点との関連で，彼のカレジ学生批判の特色を探りたい。この作業を通して，当時のカレジの変容の社会的一側面に迫りたいと希念する。

II

ブロンソンはその匿名の著作を通して筆者が強烈な印象を受けた，スケールの大きな唯一のアメリカ人思想家である。前述のように，ホリー・クロス・カレジは1843年に開学したが，6年後の1849年，初の卒業生に学位を授与すべく，マサチューセッツ州に対して設立認許状を申請した。州議会は次のような理由を根拠にこれを拒否した。本来，州内の高等教育機関は全て公的な性格を持ち，あらゆる宗教信条の学生に対して門戸を開くべきである。この原則は，学生の特定の宗派への限定を禁じたアムハーストの設立認許状に典型的に表れている。ところが，ホリー・クロスはカトリックの子弟のみを入学させる，という異例な方針を公言している。州はこうした組織に設立認許状を与えることはできない，と。これに対して，申請者の一人が，匿名で長文の反駁を公表した。州議会の多数派は，カトリックの子弟のみ向けのカレジゆえに，ホリー・クロスの設立認許状を拒否する。アムハーストと同一条件でしか許可しないと言う。しかし，これは前提が間違っている。ホリー・クロスは，認許状の取得を通して，州に対してカトリック子弟向けの学校の設立の許可を求めたのではない。そうした権利は，許可を受けるまでもなく，州憲法が全ての州民に予め保証している根本的権利である。認許状の申請は，こうした当然の権利をカレジの設立に即して行使する許可の要求に過ぎず，この申請をカレジの公共性から検討するのは，本末転倒している。実際，マサチューセッツの既存の殆どのカレジやセミナリーは，ホリー・クロスと同じく，入学生の特定の宗教信条を前提に運営されており，しかも認可を得ている。アムハーストの規定こそが例外なのである。公的に財政援助を受けるならともかく，ホリー・クロスのような私学が，その宗教信条に基づく運営の故に認許状を拒否されるのは，全く理に叶わない，と（ブロンソンは）反論したのである。[9]

本節では，1840年代初期のブロンソンの政治思想を紹介し，ホリー・クロス擁護の論旨をその中に位置付ける。1830年代，40年代のブロンソンの

思想・宗教信条はいくつかの大転回を遂げ，猫の目のように変化した。中でも，1844年10月にはカトリックへ転向したのである。[10] 当然ながら，1840年代初期の思想と，1849年の論点との比較には注意を要する。にもかかわらず，後述する如く，両者には通底する思考が見られる。初期の政治論は，ホリー・クロス擁護論に光を当てる。1840年７月，ウースター近郊の民主党員を前に行ったホイッグ党批判演説と，翌年の７月公表した「社会悪とその矯正について」とを中心に，彼の政治体制観，またその多数決批判を見よう。

1840年はブロンソンの著述歴の中で特異な年である。この年彼は「労働者階級」と題する二編を，自ら編集する『季刊ボストン評論』に公表した。若きアーサー・M・シュレジンジャーJr.が注目した如く，この二編は，空想社会主義者とカール・マルクスとを橋渡しする作品であった。[11] 内容は後に紹介する。同年の７月，ヴァン　ビューレン対ハリソンの大統領選の渦中，ブロンソンはウースターに於いて民主党礼賛の演説を行った。彼はまず，イギリスのピューリタン革命・名誉革命及びフランス革命との対比に於いて，アメリカ独立革命の世界史的意義を述べ，それを基準に当時の二大政党を論じた。彼によれば，前述のヨーロッパの革命はいずれも階級の対立を反映していた。12世紀以来続いた地主・貴族階級と商業・産業資本との争いの最終局面であり，後者の最終的な勝利を画した，いわば，ブルジョワの革命だったのである。この点でアメリカ独立革命は違う。植民地のイギリス本国との利害衝突という側面は持ちつつも，しかし，背後にはより大きな目標・大義があった。それは全ての人間の解放，具体的には労働者の人間への格上げ，すなわち，土地と生産手段とを所有した労働者階級の独立の達成を目指したのである。[12]

この基準に照らして二大政党を比較するなら，合衆国のホイッグ党は明確に後ろ向きである。ハミルトンの政策が示すように，企業家を一貫して保護するホイッグ党は，根本では英国の党と何ら変わらない。金持ち階級に媚びた，人民の敵である。確かに，ホイッグ党も人民の生活状況の改善

を試みているが如くではある。しかし，企業家の保護を通して労働者の向上を図ると言う。狼を保護して羊を守るに等しい。ホイッグ党は，実はヨーロッパでの革命の目標を単に反復・墨守する，時代遅れの政党でしかないのである。これに対して，民主党は，アメリカ独立革命の大義を追求し続けてきた。独立自営職人と呼びうる者を育む為に，あらゆる手筈を講じてきた。政治的・社会的平等の実現の為に，普通選挙の実現を進め，思想の自由を擁護してきたのである。また，これら権利実現の根本条件として，政治の，徹底的分権を支持してきた。連邦銀行設立への反対も，その一つの表現なのである。(13)

では，ブロンソンは，分権と，労働者階級の独立とをどのように結び付けるのか。後に見るように，1840年の民主党敗北を通して，彼は民主党の政府観から脱却したと自ら語る。にもかかわらず，翌1841年『季刊ボストン評論』に発表した「社会悪とその矯正について」は，彼が何故分権を支持するか，明確に説明している。アメリカの階級構造を前提に，いかに社会改革を進めるべきか，ブロンソンは原理的な問いを提出し，歴史と現状とを分析する。古代からの改革思想には，人間の性格の改造を通して社会改革を計るものがある。フーリエやオーエンの受け継ぐこの思想は，人間の完成可能を前提とする。しかし実際には，人間と社会は進歩し成長もするが，決して完璧にはならない。人間の中には自己主張と，自己犠牲とが共在し，調停し難く相剋している。個々の社会も同様な相剋を抱えている。私有財産と結婚の法とを否定し，理性と道徳の上にコミュニティーの調和を目指したフーリエやオーウェンは，正しくこの前提を無視した。その結果，個人の本性が反逆を起こし，それを強力に押さえ込む必要が生じた。個人を無視した，コミュニティーによる独裁，神政が起ったのである。政府に関する誤った解釈が，こうした事態を招いた，とも言える。人間の本性に即して社会改革を図るなら，利己的と無私の両要素の調整を果たしうる唯一の組織，政府が不可欠である，という点を見落としたのである。(14)

言い換えれば，民主政の原理として個人の行動の自由を強調し過ぎては

ならず，また，多数決原理のみに基づいて，民主政を解釈すべきではない。多数決については特に批判を要する。この原理を貫徹すれば，民主政とは，多数と少数との対立を，数の多少をもって解決する制度に過ぎなくなる。多数は横暴となり，少数は反民主的勢力と見なされる。しかも厄介なことに，この多数たるや，しばしば真の多数を代表していない。合衆国民の大多数は労働者である。ところが，議会の多数派は反労働者的でさえある。労働者は自らの利益に反する代表を，雇用者に合わせ選挙せざるを得ないのである。普通選挙制度の，また普通教育の限界である。更に加えて，政治の現場では，実際に政策を立法化するのは，多数党の一部の指導者であり，真の多数決の原理は機能さえしていない。かくして，現実には，少数の有力者が，多数決の原理をてこに，多数者を支配しているに過ぎないのである。[15]

だとすれば，少数の有力者による支配を排除し，抑圧される者，中でも力を持たない少数の利益を護る仕組みこそが不可欠である。その為には，成文憲法がその権限を明確に限定し，三権の分立に基づく政府の樹立こそ望ましい。しかし，多数派が成文を勝手に解釈・適用すれば，成文憲法は骨抜きにされよう。これを防ぐには，数の多数の他に，対等者全員一致の原則（concurring majority）も基礎にすればよい。選挙人の数が代表者数を自動的に決定する方法と，他方各町村等の単位に，大小にかかわりなく，一票と拒否権とを与える仕方とを並存させればよい。ヴァモント州では，タウン単位の代表のみが議会を構成し，小さな町の権利を徹底的に保護している。社会改革が第一に実現すべきは，部分が拒否権を有する政府組織をつくりだすことなのである。[16]

多数決による横暴から，調停者としての政府による少数者，被抑圧者の保護へ。機械的な参加の平等から，公正さに基づく少数者の尊重へ。これらの立場は，1849年，ホリー・クロスの設立認許状の獲得失敗に直面して，ブロンソンの展開した議論を根底で支えている。州の多数派といえども，少数派の信教の自由を奪うことは出来ない。何故なら，信教の自由は

生得の権利（natural rights）の一つである。多数決が生み出した権利ではなく，逆に，多数決等の規則に存在意義を付与する高次の権利なのである。カトリックの大学の存在の可否を問うのが，州議会の仕事ではない。その職分はむしろ，放置すれば多数に踏み躙られる少数カトリックの教育を，守り育ててゆく所にある。少数の，特に少数の被抑圧者の権利が守られずして，どうして，一部階級のではない，全ての人間の解放に迫れようか。そして，これこそ正にアメリカ独立革命の大義なのである。(17)

Ⅲ

独立革命演説と同じ1840年，ブロンソンは『季刊ボストン評論』の7月・10月号に「労働者階級」と題する二編の論文を掲載した。彼の生涯の膨大な著述の中でも，この二論文は異彩を放っている。(18)　しかし，こうした論題は当時の一般の関心と遊離してはいなかった。最晩年のウィリアム・E・チャニング（1780－1842）も，同じ年の初め，「労働者階級の向上について」と題する連続講演を公刊した。ユニテリアン派の創始者チャニングはブロンソンの思想遍歴を大きく左右し，逆にその批判の的ともなった。ブロンソンの労働者階級論の分析に先立ち，まずチャニングの議論を参照し，これとの比較に備えたい。

機械工を聴衆としたチャニングの講演は，彼の健康問題の為，三回が二回に縮められ，整然とした体系を欠く。第一回は労働者にとっての思考の習慣の意義を論じ，第二回はそうした勧めへの反論を検討した。従って，チャニングの全体の論旨は教養を通しての労働者階級の向上であった。しかし，第二回の講演では，当時の社会問題の原因の解釈を提出し，期せずして，ブロンソンと同一対象を論ずることになった。労働者に思考を勧め，その生活向上を図るとの提案に対しては，多くの反論が出た。まず，労働者には書物を読む余暇はなく，偉大な思想との出会いは期待できない。次いで，労働者を啓蒙するには，書物が不足である。更に，社会階層間の分業に従い，思考は他の階級に任すべき，等々。これに対してチャニング

は，書物のみが思考の源泉ではなく，あらゆる人間経験が思考を促すと指摘し，特定階級による思想の独占を強く否定したのである。[19]

しかし，彼の主張に対する，更に強力な批判をチャニングは自覚していた。すなわち，ヨーロッパは言うに及ばず米国でも，階級の二極化の傾向の中で，労働者階級は自らと家族との生存の為の苛酷な戦いを強いられており，自らの向上の手段など利用したくとも出来ない，との指摘である。しかし，とチャニングは問う。こうした傾向は未来にも繰り返される歴史の必然なのだろうか。合衆国には，広大な土地，労働者の向上を図る社会的運動，労働者の生活水準の高さ，新しい社会制度等，ヨーロッパにはない新規な条件が備わっているのである。しかも，更に重要な点だが，階級の二極化の主張は，社会の原動力として，物理的な力の優勢を想定している。ところが，実際には，芸術とか技能，又知的・道徳的エネルギーという，それ自体物質的とは言い難い力こそ，自然を支配し，人間の生産力を高めているのである。生存の戦いの故に思考の余裕がないでは全く説明にならない。その力関係では，労働者の知的教養は生産力より上位にある。万が一，教養ゆえに生産力が下がっても，富の公正な配分で，人々を充分に満足させうる。その方が遥に人間の尊厳に叶ったやり方であろう。[20]

こうして，人間の非物質的な力を物質の生産の上位に置くチャニングは，労働者の悲惨の原因を労働者の側に，被害者自身の過ち或は無知に見い出す。まず，飲酒癖。この為にどれ程多くの時間と金を浪費し，向上のチャンスを失い，また健康を蝕むことか。次いで，慎ましさの欠如。特に，若い労働者は上流階級の生活様式を無闇に真似する。彼らの自制心が財政と時間とにかなりの余裕を作ろうものを。更に健康への無関心。この結果，その生活のいかに多くを破壊していることか。最後に，怠惰。これほど容易に労働者の家族を，落ち込ませうる原因はない。要するに，チャニングの判断では，労働者の悲惨の主因は，いずれも労働者の意志に係わる。必要なのは一方では，労働者の自己の威信・自信の回復である。そのためには，労働の歴史と仕事の意義を広め，発明家を表彰して，近代の労

働者の存在意義を周知せしめよう。他方，労働者の子弟に質の高い教育を施すべきで，その為，優れた教師の訓練と確保とが必須となる。キリスト教も，労働者を中心とする人間の威厳の回復に重要な役割を果たす，とチャニングは主張するのである。[21]

ブロンソンは，1840年７月の「労働者階級」を，一部は上記のチャニング講演を念頭に置いて書いた。[22] その論旨はチャニングとは著しい対照をなしている。その現状の分析において，また現状の歴史的起源の分析において，更には現状の打開の方策提言において，「労働者階級」は刮目に値する。ブロンソンは，次いで10月に，７月論文への批判に対する論駁を同一題名で公表した。体系的な論述は７月論文に見い出される。しかし，10月論文も重要な論点を含む。以下では，７月論文を「労働者階級－Ⅰ」，10月論文を「労働者階級－Ⅱ」と表記する。まず「労働者階級－Ⅰ」の論点を追ってみよう。

その論点の概要は次のようである。1840年時点での英米社会では不平等が目立つ。一方には，自ら生産した富を享受出来ない多数者，他方には，これら多数を搾取し富裕化した少数者がいる。南部の奴隷制を凌ぐこの不公正な事態に平和的解決はない。必ずや未曽有の流血闘争を迎えよう。富の不公平の起源は，僧侶階級の誕生に求められる。彼らは，一般人の不安に巧みに応えつつ特権化し，富を築いた。現在の問題の解決も，僧侶階級の廃絶から開始し，次いで，世襲財産と独占の特権とを廃止すべきである。仮令，階級間の力の対決は避けられなくとも。

まず貧困について詳しく見よう。ブロンソンによれば，世界の労働階級の諸状況は未だ充分に分析されていない。英国の労働者の窮乏化は目を覆いたくなる程であるが，中産階級は何ら援助の手を差し延べない。それも当然で，フランス革命に於いては，英国は中産階級を支持したに留まり，革命が大衆へと拡大するや，武力弾圧を図ったのである。現代では，労働者階級は中産階級と敵対するに至っている。カーライルは普通教育の徹底と移民計画とを提案するが，それでは到底解決にならない。貧民への普通

教育で必要な食料の量を減らせる訳ではないし，富の分配が不公平な以上，労働者の生活の向上は望めないからである。移民の提案も不毛である。窮乏化の原因は人口絶対数の増加ではなく，分配の不公正にこそあるからである。[23] ところで何故，富を生産する多数の労働者が貧しく，少数の非労働者が豊かなのか。労働者の大多数は生産手段を所有しない未熟練者であり，常に失業と飢餓の危険に晒されている。ここに産業主義の強さの秘密が隠れている。南部の奴隷と比較し，北部の「自由」労働者は相対的によい生活条件下にあるように見えるが，事実はさにあらず。雇用主から見れば，工場制は奴隷制より少なくとも25パーセントは安上がりである。奴隷制では，マスターは自分が搾取する奴隷の生存には責任を持つ。仮令，家畜の生存レヴェルに近いとしても。これに対し，北部の工場主は労働者を最低限の賃金で雇い，その生存を保証せずに済む。女工の悲劇がこれを象徴している。近代的な賃金制度の内実は，労働者の徹底的な搾取の方法の正当化である。かくして，北部の「自由」労働者の状況は南部の奴隷より悲惨である。貧しい者が益々貧しくなるのは，個人の努力ではなく，社会の仕組みの問題である。労働者自身が富裕化する唯一の方法さえも，仲間の労働者の搾取を置いてないのである。[24]

こうした窮状から労働者を解放する方策はないのか。問題が元来制度に係わる以上，労働者の内面規律の向上というチャニングの提案では，解決に導けるはずがない。更に，こうした作業を率先するのは，牧師であり教師であろうが，彼らもまた制度の一部を形成し，しかも労働者ではなく，資本の側に立つのである。内面規律の向上は問題解決ではなく，その深刻化に過ぎない。キリスト者が改革に立ち上がるなら，まず自ら真のキリスト者になるべきであり，この場合彼らは何よりも，「同胞を苦しめるこの有害な社会制度に宣戦布告」[25] すべきなのである。

しかし，何を成すべきか本格的に探求するには，社会的不平等の由来を歴史的に解明せねばならない。個々人の資質の差異が，現実の富の偏在に対応する開きを持つはずがない。根本的な原因は別な所にある。ブロンソ

ンは，孤絶し，互いに差異を持たない原始人が文明人へ移行する時期に，社会的不平等の発生を認めた。前述した如く，この移行を実現したのは僧侶階級である。彼らは，常人の抱く不安，不安を引き起こす現象を専門的に解釈して安心させ，その見返りに，労働からの解放と権力の獲得，富の蓄積を約束させた。神の力を根拠とする独裁制の誕生である。この過程で常人は精神的にも，物質的にも疎外された。不平等社会が恒常化した。労働者階級の向上の為には，まず専門家としての僧侶階級を，完全かつ最終的に追放すべきである。同時に，キリスト教の核心を力強く復興せねばならない。すなわち，既存の階級関係を逆転し，根本的に社会を変革するという，イエスの教えに立ち還ることである。自らの富裕化に腐心する教会への復帰とは何の関係もない。(26)

次いで，政府を縮小し，労働者に不利な法体系を廃止すると共に，平等促進の為の法を制定する。僧侶階級の廃止と政府の縮小を通し，歴史と共に古い神聖政治に終止符を打つのである。19世紀には，しかし，企業家が政治制度を含む社会体制を悪用していた。中でも，企業家と銀行との癒着は目に余り，後者の廃止が不可欠との印象を与えた。産業社会が再生産する不平等の根絶には，搾取の仕組みを支える原則の破棄を要する。ブロンソンは，資本の蓄積を促進する独占と世襲財産制に注目し，その廃止を提案する。(27)　一方では，彼は人間固有の権利と考える私有財産の廃止を宣言しない。理想のアメリカ人とは，生産手段を所有し，技能を磨き，公正な競争に邁進する独立自営職人だからである。他方，財産の子孫への譲渡は富の偏在を加速し，搾取の体制を強化する。一個人が蓄積した財はその死の瞬間に社会に帰属し，次の世代の国民に平等に分配されるべきなのである。この提言が大胆で，実行困難なことは，ブロンソン自身充分承知していた。当時の社会体制は理不尽な搾取の上に成り立っていたこと，その体制は伝統的な慣習に深く根差していたこと，そしてその結果，階級の分極化は容赦無く進行するであろうこと，人間は特権を容易には放棄しないこと，こうした認識の帰結としてブロンソンは血なまぐさい階級間の闘争

を予言したのである。未曽有の流血の中で巨獣が死に果てるまでは，積極的な未来への展望を切り開き難かったのであろう。そして，「労働者階級－Ⅱ」では，以後の国家間の戦争は最終的には，全て二階級間の闘争に発展して行くだろうと述べ，階級闘争としての歴史を宣言するに至るのである。[28]

「労働者階級－Ⅰ」への非難の一つは，ブロンソンがキリスト教を否定した，との主張である。これに対して彼は，キリスト教会は否定するが，イエスの教えは肯定する，との論点を繰り返した。前者は労働者を搾取する人間の制度であり，後者は神の語る，搾取の廃絶と平等の確立への呼び掛けである。[29] 社会的不公正を神の名において糾弾し，この世に公正の実現を図る者達は，ブロンソンの主張にキリスト教の復活を見た思いであったろう。しかし，彼らは少数派であった。そこに，1834年以来イエスを社会改革者と見なし，そうした解釈に沿う労働者教育を実践してきたブロンソンの苦悩もあったに違いない。後に見る，カレジ学生への批判も，そうした実践の中で，培われたのである。

ブロンソンは，牧師の養成体制も批判する。現在の牧師は召命によらず，それが，手仕事より世間での評判も高く，高給であるが故に選択される。牧師は，初等学校，アカデミー，カレジへと進学した学生が，最終段階で，医者，法律家と比較し，選択する専門職の一つに過ぎない。加えて，その訓練内容は本を読み，死んだ思想を学び，ライセンスを得ることである。その結果，独立心・自立心より，妥協が培われる。これには，合衆国に著しい牧師職の維持形態も一枚噛んでいる。教会或は国家が牧師職を維持する仕方とは対照的に，この国では，任意の支持者が聖職者の地位を保証することが多い。会衆派を見れば，牧師は，自らが説教する相手により支えられている。当然にも牧師は，支持団体，特にその中の有力者に依存しがちである。これでは，牧師は体制に組み込まれてしまう。イエスのキリスト教に立つことは出来ないのである。[30]

キリスト教の扱いに関する批判と並び，合衆国での労働者階級について

の認識に誇張や誤りを指摘する声も高かった。ブロンソン自身，英国に比べ，合衆国の労働者の条件が良いことを認めた。[31]　しかし，こうした批判者は，古い時代にのみ有効な枠組みで現代の事実を観察し，判断を下していた。嘗ては個人の勤勉・努力が生活のレヴェルを引き上げ，また共同体へも大きく貢献した。多くの者はこうした目で労働者の悲惨を観察し，彼らの努力不足・道徳性の低さを指摘した。他方，搾取し富裕化した側に，勤勉と努力の模範を認め，不当な優越感を与えた。しかし，「他人の労働をいかに自己の利益に転化するか」熱心に研究する企業家は，勤勉なのだろうか。努力と搾取とを取り違えていないか。道徳的に責めを負うべきは，自らの成功の秘密を古い枠組みでカモフラージュする側であり，イエスの言う神の正義は搾取されている側にこそ在る。かくして合衆国の使命は，その労働者階級を，自己の資本と技能とを持つ「高潔で自由な労働者」に変身させることなのである。[32]

Ⅳ

1844年10月20日，ブロンソンはカトリック教徒となった。社会制度としての伝統的な宗教への彼の関心は，一つの頂点に達した。しかし，他方，1840年の「労働者階級」論文の象徴する彼の社会批判の精神は，依然強く残っていた。1844年の８月，ウェズレヤン大学で彼の行った演説「社会改革について」で，ブロンソンは二つの関心を結び付けている。冒頭で断っているように，彼はこの論述の殆どを，既成の社会改革家の分類と，その改革方針の問題点の批判に当てた。こうした批判点を踏まえて，最後に改革提案の要点を記すが，それは平凡でかつ単純である。すなわち，本来のキリスト教への帰依である。にもかかわらず，この提案を導く分析には鋭いものがある。常識的な宗教論とはある一線を画すのである。

ブロンソンは，当時の社会改革者を５つに類型化した。すなわち，組合運動家，議会の改革派，未来指向の改革派，政府無用論者，そして宗教排除派である。順序の後ろのものほどブロンソンの批判は根本的・激烈とな

る。従って，ここでは最後の批判に重点を置き，その他は殆ど素通りする。彼によれば，第一の組合運動家は成功しないであろう。労賃の抑制を通しての競争という，近代社会の基本論理を無視しているからである。第二の，立法を通して改革を図る者も同じである。彼らは，需要と供給の原理で決まる賃金を，法律を通して規制しようとする。第三の未来改革派は全く新しい社会秩序の創出を企図する。しかし，オーエン，サン・シモン，フーリエはいずれも，社会と人間について現実的な把握を欠き，その改革の成功は望むべくもない。第四の政府無用論者は社会悪の根源を政府に求め，政府の廃止を図る。しかし，生まれたままの人間は著しく不平等であり，放置すれば，強者は弱者を圧迫する。政府は，こうした状態の中で正義を守る使命を帯びて登場する。これを廃止して自由を守るなどの主張は，ナンセンスの一言に尽きる。[33] 自伝にもあるように，1840年の民主党の敗退の経験から，彼は，「この世で我々が求むべきは平等ではなく，正義である。秩序に基づく正義を国家の中に維持し，人と人の間に正義を維持するには，堅固で強力かつ効率的な政府を要する」ことを学んだのである。[34]

宗教の否定を試みる改革者をブロンソンは最も激しく批判する。社会改革者が取り組む大問題は，資本と労働との分離である。ところが，この分離の背後には近代社会の病根が横たわっている。それは，全てを自らの前に跪かせている拝金主義の横行である。拝金主義は昔もあった。しかし，近代以前には，教会の権威が，その君臨を妨げていたのである。精神的世界が実在性を失い，信仰が地に落ちた近代以降，状況は一変した。拝金主義は今や我がもの顔にのさばる。豊かさは成功と同義であり，貧しさは失敗を表す。富は善，貧は悪との公式はもはや敵を持たない。嘗て富の専制を批判した唯一の力，現代の社会問題の根本前提を批判し得る唯一の力である宗教を，事もあろうに社会改革者が廃絶しようとする。何と言う気違いざたであろう。社会問題の根本前提を批判するには，神への信仰の復活こそ不可欠なのだ。貧しさには誇るべきものが多く，豊かさはむしろ神の

怒りを招くとの教えを，力強く復興することなく，現代の問題を解決するのは不可能なのである。[35]

こうした社会改革の運動の中で，カレジ学生の役割は何か。彼らは，不当な社会組織と富を糾弾し，神と人とに奉仕するのか。それとも，自ら拝金主義に埋没し，神と人を搾取して，時代の支配者になるのか。カレジとは果たして，拝金主義に抗して真理を守り，世に伝える組織なのだろうか。これこそブロンソンが，1843年の7月と8月，ダートマス・カレジとヴァモント大学に於いて，学生及び同窓生を前に論じた主題であった。「学者の使命」と題した講演で，彼はまず学者を，当代の学問の殆どをマスターし，かつ自らの人生の積極的な意義を肯定する者，と限定した。古今の文学・哲学・科学等に通暁しているのみでなく，そうした知識を用い，人類の歴史の暗やみ，現代の暗部に光明を投じ得る者のことである。人間の運命を捉え，その実現の手段を探り，大衆に提示する者であり，その仕事は深く宗教に係わるのである。[36]

しかし，学校が普及し，宗教的傾向を備えた教養人が増えても，学者が増加するわけではない。学者は，元来，大衆から孤立し，敵対さえする者だから。最近では，人間の平等の主張が強く，自称学者の中にも，それを主張する者も少なくない。しかし，人類の過去，現在，将来を明確に見通し得る者が，大衆と同じ物の見方をするはずがないのである。学者は，しばしば，大衆には気に入らない言説を述べるだけでなく，時には彼らの大行進の正面に身を投げ出して，それを押し止めねばならないのである。鋭い学者の目には見える破局が，大衆には地平にかすむ幻に過ぎず，その結果，学者は彼らの怒りさえ買うことになろう。

しかし，大衆からの孤立は，大衆への敵対ではない。学問の研究は少数者の仕事だが，その仕事の目的は大衆の為である。しかも，本物の研究であればあるほど，この仕事と，仕事の目的とは分裂してしまう。学者の宿命である。平等主義たけなわの今日，大衆に媚び同調する多くの学者は偽物であるが，彼らはまさにこの分裂を知らない。彼らは，過去，現在，未

来を鋭く見通せない。仮に，一時は見えても，やがて大衆と同じ事柄しか見なくなる。彼らは，大衆の上に立ち，彼らに奉仕し，生計の糧を得ている，と思っている。しかし，事実はそうでない。企業家は，安い賃金で労働者に商品を作らせ，それを売り捌き利益を得る。偽学者は大衆に媚び，大衆が作ったに過ぎない只の知識を，大衆に売り付け利益を得る。これは搾取とさえも言えるであろう。ところが，彼らは自ら大衆の味方の如く思い込んでいる。その上，彼らは，大衆の無知に同調して得ただけの成功を，神が自分に与えた素質の結果と考えている。しかも，企業家なら労働者を頭から軽蔑している可能性も強く，その点，正直と言えないこともないが，偽学者は大衆に同化し持ち上げておきながら，これを実際にはどこかで軽蔑している。企業家の悪に加えて，知らずに大衆を欺くという，一層大きな罪を犯しているかも知れないのである。(37)

「労働者階級」でのブロンソンは，企業家を念頭に置き，搾取の社会体制の改革を期待して，遺産相続の廃止を提唱した。では，学者には何を提言したか。まず，平等主義の現代，大衆に同調して大衆を搾取し，自ら偽学者に成り下がる危険を指摘した。これこそ当時のカレジ卒業生にとって，「広き門」であったろう。これに対して，ブロンソンは，学者にとっての「狭き門」も示した。学識を駆使して，過去・現在・未来を鋭く見通し，大衆に媚びることなく，時として不吉な警告を発する。大衆の賞賛を期待しないのみかは，その迫害にもたじろがず勇気をもって耐えることである。これはブロンソンが本講演で述べた主張に留まらず，「労働者階級」の公表とそれ故の迫害への忍耐を通し，1840年代の前半，自ら垂範した教えでもあった。遺産相続の禁止に対応する提言として，ブロンソンはカレジの学生に，自己の否定（abnegation of self）の理解と訓練とを強く勧めた。(38) 大衆に媚びてその賞賛を求め，結果的には彼らを搾取し，偽学者とならない為の強力な指針である。しかしこの自己の否定は，少数の真の学者向けの指針であった以上に，1840年代のカレジ卒業生大多数を待ち受ける甘美な落し穴についての，「学者」ブロンソンの警告だったのではない

だろうか。1840年代の合衆国は，その学識と洞察において，マックス・ウェーバーにも比肩する醒めた熱情家をすでに持っていたのである。

註

(1) 例えば，W.P.メツガー『学問の自由の歴史Ⅱ』東京大学出版会，1980年参照。

(2) 拙稿"The American Scientists and the Rise of the Elective Principle." *ICU Educational Studies*, 24(1982)参照。

(3) Sally Kohlstedt. *The Formation of the American Scientific Community*. Urbana, 1976; Robert Bruce. *The Launching of Modern American Science*. New York, 1987参照。

(4) Stanley Guralnick. *Science and the Ante-bellum American College*. Philadelphia, 1975参照。

(5) Russell Chittenden. *History of the Scheffield Scientific School of Yale University*. New Haven, 1928, pp.30ff.; 拙稿 "The Struggle over the Lawrence Scientific School and the Return of Alumni Control to Harvard." *ICU Educational Studies* 25(1983), pp.1-26.

(6) Lawrence Cremin. *American Education: The National Experience*. New York, 1980, pp.182-183; Carl Kaestle. *Pillars of the Republic*. New York, 1983 pp.106-107参照。

(7) *The Seventh Census of the United States, 1850*. Washington DC 1853, pp.61-63等参照。

(8) Colin Burke. *American Collegiate Populations*. New York, 1982 p.54参照。

(9) 拙稿"'Public' vs. 'Private' Colleges in 19th Century Massachusetts: The Ordeal of the College of Holy Cross in 1849." *ICU Educational Studies*, 28(March 1986), 1-24参照。

(10) Arthur M. Schlesinger Jr. *Orestes A. Brownson: Pilgrim's Progress*. Boston, 1939; Orestes A. Brownson. *The Convert: Or, Leaves from My Experience*. (1857) In *The Works of Orestes A. Brownson*, vol.V, 1966参照。

(11) Schlesinger, *op.cit.*, p.96参照。

(12) Orestes A. Brownson. *An Oration before the Democracy of Worcester and Vicinity, Delivered at Worcester, Mass., July 4, 1840*. Boston, 1840, pp.15-17参照。

(13) *Ibid.*, pp.24-33参照。

(14) Orestes A. Brownson. "Social Evils, and Their Remedy."*The Boston Quarterly Review*, (July, 1841), 267-276参照。

(15) *Ibid.*, pp.278-281参照。

(16) *Ibid.*, pp.287-289参照。

(17) ブロンソンはJohn Rawlsの先駆者だったとも言えそうである。

(18) この二論文は彼の著作中で「最も良く知られており，細かく紹介する必要もない程である」。Leonard Gilhooley. *Contradiction and Dilemma: Orestes Brownson and the American Idea*. New York, 1972 p.48. 因に二論文は1978年 *The Laboring Classes (1840) with Brownson's Defence of the Article on the Laboring Classes* のタイトルのもとに，SCHOLAR'S FACSIMILES & REPRINTSから覆刻されている。

(19) William E. Channing. "On the Elevation of the Laboring Classes." In *The Works of William E. Channing, D.D.* vol.V, Boston 1841, 189-198参照。

(20) *Ibid.*, pp.204-208参照。

(21) *Ibid.*, pp.208-221参照。

(22) チャニング講演への直接の言及も見られる。Orestes A. Brownson. "The Laboring Classes." *The Boston Quarterly Review*, (July, 1840), p.375参照。

(23) *Ibid.*, pp.363-365参照。

(24) *Ibid.*, pp.368-372参照。

(25) *Ibid.*, pp.376.

(26) *Ibid.*, pp.379-386参照。

(27) *Ibid.*, pp.392-394参照。

(28) Orestes A. Brownson. "The Laboring Classes." *The Boston Quarterly Review*, (October,1840), p.508参照。

(29) *Ibid.*, p.428参照。

(30) *Ibid.*, pp.454-455参照。

(31) *Ibid.*, pp.472-473参照。

(32) *Ibid.*, pp.463-464, 479参照。

(33) Orestes A. Brownson. *Social Reform*. Boston, 1844, pp.10-30参照。

(34) *The Works of Orestes A. Brownson*, V, p.121.

(35) Brownson. *Social Reform*. pp.31-40参照。

(36) Orestes A. Brownson. *The Scholar's Mission*. 1843, pp.6-10参照。

(37) *Ibid.*, p.20,25-26,32参照。

(38) *Ibid.*, p.22.

ORESTES A. BROWNSON AS A CRITIC OF AMERICAN SOCIETY IN THE 1840S

《Summary》

Akira Tachikawa

Orestes A. Brownson (1803–1876), an American social reformer and thinker who was converted to Catholic in the 1840s, came to my attention in relation to the study of the Holy Cross College's unsuccessful attempt in 1849 to obtain a charter from the State of Massachusetts. Brownson turned out to be the author of an anonymous article which defended, powerfully and logically, the defeated cause of the College. The current essay represents the first round of my effort to introduce the outlines of his thought with reference to his critical evaluations of American society and college graduates in the 1840s.

The essay first analyzes Brownson's political thought which offered a background to the defense of the College. Locating the true and distinctive cause of the War of Independence in the emancipation of all the people without exception, he harshly criticized the Whig party as the political stronghold for the limited class of industrialists. In contrast, he specially put stress on the importance of the helpless minority whose rights, when left to themselves, might be overrun by the majority at the cost of the ideal of the Revolution. The state must give the College a charter in order to confirm Catholics their religious freedom, an inalienable right which was universally guaranteed of all Americans.

Moreover, in the real world of the 1840s, workers as the numerical majority in the North suffered from exploitation by industrialists, a plight which was even worse than that of slaves in the South. Seeing

the ever serious state of workers and their families, Brownson argued that the miseries derived from the social system of industrialism and that the two classes in that system would be increasingly diverged in opposite directions ultimately to bring about bloody struggles.

It was in such a context that Brownson defined the roles of college graduates. In his perspective, they might either exploit the people by committing themselves to that system, often believing, wrongly, that they were serving them. Or, else, keeping a consistently ascetic attitude towards popularity, college graduates might, at times, bravery confront the people and point to the real dangers, as well as possibilities, inherent in their ideas and actions. Thus, in conjunction with a prospect of class struggles, Brownson envisaged the mission of scholars as that of enlightened martyrs.